

氏名(生年月日)	大 津 真 優
本 籍	
学位の種類	博士(医学)
学位授与の番号	乙第2240号
学位授与の日付	平成15年11月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	EEG in children with early-onset benign occipital seizure susceptibility syndrome: panayiotopolous syndrome (Early-onset benign occipital seizure susceptibility syndrome (EBOSS) の脳波学的研究)
主論文公表誌	Epilepsia 第44巻 第3号 435-442頁 2003年
論文審査委員	(主査) 教授 大澤真木子 (副査) 教授 川上 順子, 二瓶 宏

## 論文内容の要旨

### 〔目的〕

Early-onset benign occipital seizure susceptibility syndrome (EBOSS) は、特異な臨床徴候と経過を呈し、脳波上後頭部に焦点を示すとされている。最近、そのてんかん焦点は必ずしも後頭部に限局せず、経時的に移動することや、多焦点性であることが報告されており、その脳波所見が非特異的なのか、一定の傾向を示すのか、所見の違いによる臨床的差異の有無が存在するかは明らかではない。また、初期には薬剤抵抗性の発作を反復する例が存在するため、診断や治療方針決定に際し、脳波学的特徴を明らかにすることは重要である。

本研究では EBOSS の脳波てんかん波焦点の経時的变化を詳細に検討し、特徴の有無、臨床症状との関係を検討した。

### 〔対象および方法〕

対象は 1968～1998 年の間に当科外来を受診し、正常発達、正常脳画像所見、1～8 歳発症、特徴的な発作性嘔吐を有し EBOSS と診断され、2 年以上当科外来に通院し、6 カ月ごとに脳波記録がされた 76 名である。

各年齢毎に横断的に脳波焦点部位につき集計し、発作焦点分布の年齢別傾向を検討した。またてんかん波焦点の局在変化を年齢縦断的に検討し、同じパターンを呈する症例群を集め、各症例の臨床特徴(発症年齢、発作回数、重積頻度、発作有期間、IQ)を比較検討した。

### 〔結果〕

76 名のてんかん発症年齢は平均 48 カ月、発作有期間は平均 27.5 カ月であった。年齢横断的集計では、2～5 歳では発作波出現は後頭部(O)が最も多く、4～7 歳では前頭極(Fp)と O に独立または同期して出現する傾向を、6～10 歳では中心-頭頂-側頭(CPT)に出現する割合が増した。

年齢縦断的に個々の症例を検討すると、①O 限局群(常に O に限局する群)、②Fp-O 群(O から Fp へ移動、その後は同期したり独立して出現する群)、③全般性群(Fp-O に出現するが、その後全般化する群)、④CPT 群(O から CPT へ移動するが、Fp へは焦点が移動せず CPT を中心とする群)、⑤てんかん性脳波異常のない群、の 5 群に分類可能であった。全般性群では他の群に比べ、痙攣重積頻度が高く、発作有期間が長かった。いずれの群でも予後は良好であった。

### 〔考察〕

EBOSS では、てんかん性脳波焦点は O に留まらず、頻回に移動、多焦点化するが、一定の傾向を示すことが判明した。また全般性群では重積頻度が高いなどの臨床経過の特徴が、脳波の傾向から推測された。

〔結論〕

EBOSSは脳波学的には多焦点性に異常が認められるが、いずれも予後良好であった。

## 論文審査の要旨

Early-onset benign occipital seizure susceptibility syndrome は、特異な臨床徴候と経過を呈し、脳波上後頭部に焦点を示すとされてきたが一部異論もあり、同脳波所見が非特異的なのか、一定の傾向を示すのかは不明であった。また、長期予後は良好であるが、初期には薬剤抵抗性の発作反復例が存在し、診断や治療方針決定に際し、脳波学的特徴を明確にすることは重要である。

本研究では過去にない多数例の脳波のてんかん波焦点の経時的変化を詳細に検討し、特徴の有無、臨床症状との関係を検討した。年齢横断的集計と年齢縦断的検討をし、そのてんかん性脳波焦点は後頭部に留まらず、頻回に移動、多焦点化するが、いずれも予後良好で一定の傾向を示すこと、また全般性群で重積頻度が高いなどの臨床経過の特徴を明確にした。

本研究の国際てんかん症候群分類への寄与は間違いない。この点で本論文は価値がある。